

特集



あなたと栄仁会をむすぶ情報誌
Jul.2013

10

アウトリーチが切り拓く 統合失調症 支援の 新たな可能性



- 宇治おうばく病院のアウトリーチ
- 宇治おうばく病院アウトリーチチーム「ゆるりの活動」
- 栄仁会ドキュメント THE 舞台裏「当院の調理室すべて見せます!」



医療法人 栄仁会

宇治おうばく病院

べるぶ:仮語のVERVE「活気」より

Column 統合失調症とは

考えや気持ちがまとまらなくなる状態が続く精神疾患で、その原因是脳の機能にあると考えられています。思春期から40歳くらいまでに発病しやすく、約120人に1人がかかるといわれています。現在は優れた治療薬が数多く開発され、早期治療によって回復することができます。

京都府の事業要綱では、対象となる方の疾患を「統合失調症」「気分（感情）障害」と定めています。この方針を受けて、近年、各都道府県は、地域の精神科病院等と連携してアウトリーチの取り組みを推進しています。

精神疾患の症状が重い人の中には、抱えている課題が複雑で、自らの困難を相談することができないという状況の方が多いです。また、必要な受診を中断してしまうことがあります。このような方々に対しては、医療を含む多職種チームによる訪問支援が求められてきました。

アウトリーチとは

「アウトリーチ＝手を伸ばす」という意味であり、生活の場に直接訪問して支援活動を行うことを指します。医療や介護の世界では、事業所が在宅の患者さんや要介護の方を訪問して支援する活動がイメージされます。近年では、援助が必要であるにも関わらず自発的に治療や生活支援を受けない受けることができない人々に対して、訪問を通じて積極的に働きかける支援を「アウトリーチ」と呼ぶことが多くなっています。

厚生労働省は、2011年4月に「精神障害者アウトリーチ推進事業の手引き」を発行。医療機関への受診が困難な精神障がいの方々に対して、各自治体が地域の医療機関と連携して積極的に働きかけ、支援を行っていくという方針を打ち出しました。この方針を受けて、近年、各都道府県は、地域の精神科病院等と連携してアウトリーチの取り組みを推進しています。

アウトリーチが必要なわけ

精神疾患の症状が重い人の中には、抱えている課題が複雑で、自らの困難を相談することができないという状況の方が多いです。また、必要な受診を中断してしまうことがあります。このような方々に対しては、医療を含む多職種チームによる訪問支援

アウトリーチとは？

what's outreach

訪問看護やACTとの違い



訪問支援を行う事業としては、訪問看護やホームヘルプがよく知られています。しかし、これらの支援は、精神科の病院や診療所で継続的に通院していること前提としています。

また近年は、多職種チームの訪問支援によって重い精神障がいの方を支える院や診療所で継続的に通院していることがあります。しかし、これらの支援は、精神科の病院や診療所で継続的に通院していること前提としています。

A C T (Assertive Community Treatment)が注目されています。これは24時間365日充実した体制により、医療・保健福祉サービスのほとんどをチームが直接提供し、重症の方を地域で支えるという包

アウトリーチが切り拓く 統合失調症支援の 新たな可能性

特集

アウトリーチ

(宇治おうばく病院「ゆるり」)

医療と生活支援の複合的なニーズに応える

ケアマネジメントを基礎とした、多職種チームによる訪問活動です。自身では治療を受けられないなど、地域生活に困難を抱える方に対して一時期（3か月～1年6か月）の集中的な支援を行います。支援後は、地域のネットワーク（医療・福祉・保健）につなげ、生活の継続や病状安定を図ります。京都府精神障害者訪問支援事業に加え、宇治おうばく病院独自の基準で幅広い対象層に対応しています。

精神科訪問看護

(STおうばく・STそうらく・ST京たなべ)

訪問で個別の看護サービスを実施

ご自宅へ訪問し、医療面、生活面を含めた支援を行います。対象者は、精神障がいを抱える利用者さんやそのご家族です。その人らしく地域で暮らし続けられるように、活動エリアも拡大し、様々なニーズに対応しています。また、24時間、365日の電話相談とともに、緊急時の訪問を随時行っています。

ホームヘルプ

(訪問介護やまぶきの郷)

訪問で生活・介護支援を実施

訪問により、入浴・排泄・食事の介護、家事、生活相談・助言など、生活全般の援助を行う事業です。対象者は、障がい程度区分1以上の方で、利用期間の制限はありません。障害者総合支援法（旧・障害者自立支援法）に基づいており、利用者は介護給付を受給することができます。

訪問型生活訓練

(訪問型生活訓練「いろは」)

地域生活を営む能力向上

地域生活を営むために、必要な日常生活能力の訓練や相談支援を行う事業です。訪問での支援を基本に、個別支援計画の進捗状況に応じて、通所による訓練を組み合わせます。訪問時は、自宅での生活安定を目的とした支援を実施。利用期間は、2年が標準となっています。



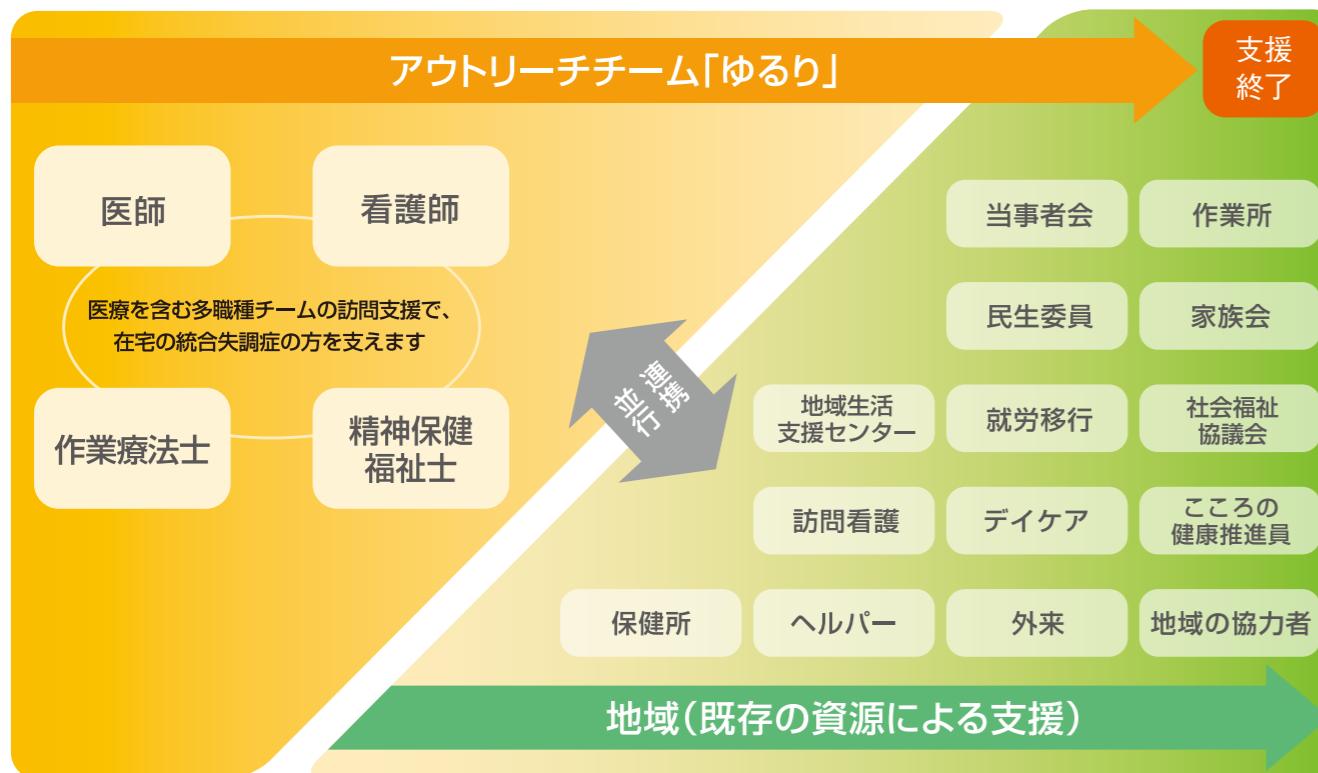
医療法人栄仁会
宇治おうばく病院 理事長
三木 秀樹 (愛知県出身・うお座)

医療法人栄仁会では、宇治おうばく病院において救急・急性期の医療体制を整備する一方で、訪問看護ステーションやホームヘルパー事業所など、地域での安定した生活を支える体制を整えてきました。しかし、統合失調症を抱える人々の中には、自ら受診することができない、相談機関に行くことも困難、という方もいます。こうした既存の制度や医療システムではケアできなかった方々への支援として、病院内でアウトリーチ事業をスタートさせました。アウトリーチは、医療・福祉ネットワークにおける、より細やかなケアの1つとして機能しています。



宇治おうばく病院のアウトリーチ

宇治おうばく病院のアウトリーチ活動の流れ



宇治おうばく病院アウトリーチの特徴

生活支援の中に医療を取り入れたご本人主体のアプローチを展開
一方的ではなく、ご本人のニーズを主体としたアプローチの中で、必要度や時期を評価したうえで医療を提供します。

多職種によるチーム体制で充実した支援を提供
多職種によるチームのため、各専門のスキル・見地から多角的で充実した支援を行なうことができます。

一時期の集中的な支援を行い地域の資源へつなぐ
3か月～1年6か月の集中的なアプローチを行い、地域の医療や福祉など安定した支援に移行した後、支援を終了します。

宇治おうばく病院 地域連携先からのメッセージ

宇治東福祉会は、宇治市・宇治田原町で障がいのある方を対象に、就労継続支援、生活介護、短期入所などを行っています。「そら」は、相談支援活動を行っています。宇治おうばく病院のアウトリーチの存在は知っていましたが、当初は「治療は病院の担当領域」という意識でした。しかし、詳しくお話を伺うと、アウトリーチには終わりがある。その後は地域で対象者の方々をサポートする体制が必要だと感じました。現在は、宇治おうばく病院のスタッフや障がい福祉サービスの相談支援事業の担当者の方々と、地域の受け入れ体制などを話し合っているところです。すでに地域に戻っている方もおられますので、まずは地域の力、人の力でカバーしながら、しっかりとアウトリーチを終えた方々を支えていきたいと考えています。



社会福祉法人 宇治東福祉会
宇治市障害者生活支援センター「そら」センター長
鳥羽 耕造さん
(京都府出身・いて座)

「ゆるり」には、医師4名、看護師、精神保健福祉士、作業療法士が2名ずつ在籍し、ケースによって薬剤師や臨床心理士もチームに加わります。この多職種のメンバーが、利用者の状態に応じて3、4名単位のスマートチームを結成して、お1人の利用者を支援していきます。各チームには医師が所属していますので、訪問先でも医学的な診断や処置を行うことが可能です。もちろん、各種の専門的な知識とスキルを活用することもできます。また、訪問時以外でも、利用者からの相談や問い合わせに対応しています。

「ゆるり」の対象疾患は、統合失調症です。この疾患の特性の1つに、ご本人の病識の乏しさがあります。ご自身に病識がないと、受診の必要性を自覚することができず、治療中の責任者を担当しています。同年6月には、当院独自にアウトリーチを開院におけるアウトリーチ活動の統括責任者を担当しています。現在、当院のアウトリーチは、「ゆるり」の名称で活動しています。

宇治おうばく病院では、2011年1月にアウトリーチ活動についての検討を始めました。以来、私は当院におけるアウトリーチ活動の統括責任者を担当しています。同年6月には、当院独自にアウトリーチを開院しています。同年10月には、京都府から「アウトリーチ推進事業」の委託も受けています。現在、当院のアウトリーチは、「ゆるり」の名称で活動しています。

「ゆるり」には、医師4名、看護師、精神保健福祉士、作業療法士が2名ずつ在籍し、ケースによって薬剤師や臨床心理士もチームに加わります。この多職種のメンバーが、利用者の状態に応じて3、4名単位のスマートチームを結成して、お1人の利用者を支援していきます。各チームには医師が所属していますので、訪問先でも医学的な診断や処置を行うことが可能です。もちろん、各種の専門的な知識とスキルを活用することもできます。また、訪問時以外でも、利用者からの相談や問い合わせに対応しています。

「ゆるり」の対象疾患は、統合失調症です。この疾患の特性の1つに、ご本人の病識の乏しさがあります。ご自身に病識がないと、受診の必要性を自覚することができず、治療中の責任者を担当しています。同年6月には、当院独自にアウトリーチを開院におけるアウトリーチ活動の統括責任者を担当しています。現在、当院のアウトリーチは、「ゆるり」の名称で活動しています。

アウトリーチの導入

症です。この疾患の特性の1つに、ご本人の病識の乏しさがあります。ご自身に病識がないと、受診の必要性を自覚することができず、治療中の必要性を自覚することができます。中斷期間が続くと、幻覚妄想や感情の不安定さなどが見られるようになります。また、再発を繰り返すと、次第に生活レベルが落ちることもあります。そういう方に、医師を含めた多職種チームが訪問することで、医療・生活の両面から支援していきます。

「ゆるり」では、2013年4月時点

点で延べ13の方を支援してきました。対象者は、治療中断や未治療の方、頻回入院の方、長期入院後の方です。13人のうち7人の方は、既にアウトリーチの利用を終え、地域資源に支援を移行しています。地域からのご依頼も少しずつ増えています。

</

アウトリーチの現場から～ 「ゆるり」チームスタッフの声



看護師 多職種で意見を出し合える
関係は良い刺激になります。

宇治おうばく病院 外来
中村 利恵 (京都府出身・ふたご座)

訪問支援は、利用者の方に受け入れられることから始まります。そのため、障がいや疾患に焦点を当てるのではなく、利用者を尊重し、心を重ねて関係を作るよう心がけています。現場では、看護の視点を持ちながらも職種に縛られず、調理や外出など生活支援を通じて関わっています。時には生活支援の中で、薬を“内服する”意味づけをしていくこともあります。今後も粘り強く希望やニーズを引き出し、その人らしく地域で暮らししていくために必要な支援をタイムリーに展開していきたいと思います。

精神保健
福祉士 本人主体の支援に取り組み、
地域で支える体制づくりを目指す。

宇治おうばく病院 地域連携室 精神保健福祉士
田中 諭子 (京都府出身・おうし座)

私は、「ゆるり」の専従スタッフであり、チームリーダーをしています。精神保健福祉士として、ご本人が病気や障がいを抱えながらも自分の望む生活を続けていくように、生活面・仕事面・経済面などの相談に応じて、地域の様々な資源とご本人をつなげアマネジメントを実施します。多職種チームで支援しますが、現場では職種の枠を超えてご本人が求める関わりを提供できるように動いています。今後も、アウトリーチを通して、関係機関等と協力しながら地域で支える体制づくりに取り組んでいきます。



相談受付から
支援終結まで

宇治おうばく病院アウトリーチチーム 「ゆるり」の活動



地域連携室 主任 精神保健福祉士
瀧井 忍 (京都府出身・おうし座)

山城北圏域～京都市内と 幅広いエリアに対応

私は、アウトリーチ活動の立ち上げ時から、チームの運営・管理を担当しています。受託している府事業の機能を果たしながら、身近な地域のニーズを確認し、当院独自のアウトリーチチームの方方にについて検討を重ねてきました。

現在「ゆるり」では、府事業が対象地域としている山城北圏域に加えて、京都市内の一部地域（当院から30分程度の地域にお住まいの方）も対象としています。支援希望のご相談は、まず私たち担当の精神保健福祉士が窓口となつて内容を伺います。ご相談は主に、ご家族や福祉事業所、行政機関などから多く受け付けています。その後、府事業としての決定を受け、対象者が決まります。府事業で対象となるないケースも、チームの判定会議により対象となることがあります。利用者が決まるごとに多職種による訪問チームを編成し、このスマートルームを中心として支援計画を検討し、訪問活動を開始します。

利用者主体を理念に 充実した支援を提供

「ゆるり」で最も大切にしているの

「ゆるり」は3か月～1年6か月の訪問期間内に、地域の医療や福祉など安定した支援に移行したこ

こうした日々の訪問活動を支えているのは、スマートルームが行うカンファレンスです。特に利用者の状況が変化した際や、終結に向けて地域の関係機関と共に協議し移行していく際などは、頻回にカンファレンスを開催しています。

支援終結を見すえ、地域のネットワーク形成に努める

は、「疾病管理にならない本人主体の訪問支援を展開する」ということで、そのため訪問活動では、信頼関係の構築を第一の目標に置いて関わる者や家族が持っている長所・才能・希望などを引き出し、支援することを心がけています。

多職種のチーム構成によって、各職種の特性を活かしながらも、専門性に縛られない柔軟で多面的な見立てによる支援が可能となります。疾患や障がいの特性を理解した専門職スタッフによって、ニーズに応じた頻回・臨時訪問、集中的な認知行動療法、心理教育、地域の社会資源と利用者をつなぐマネジメントなどを実施し、充実した支援を提供できるよう取り組んでいます。

「ゆるり」では、今後さらにチームの特性を活かしながらも、専門性に縛られない柔軟で多面的な見立てによる支援が可能となります。疾患や障がいの特性を理解した専門職スタッフによって、ニーズに応じた頻回・臨時訪問、集中的な認知行動療法、心理教育、地域の社会資源と利用者をつなぐマネジメントなどを実施し、充実した支援を提供できるよう取り組んでいます。

「ゆるり」の対象となる方

- 主診断が統合失調症（未受診の疑い含む）
- 当院から車で30分以内の地域にお住まいの方（山城北圏域・京都市の一部）
- 次のいずれかに当たる方
 - 精神科受診を中断している
 - 未受診だが統合失調症の疑いが強い
 - 入退院を繰り返している
 - 長期入院ののち、退院する予定がある
- 一時期の集中的な生活支援・医療を必要としている方（3か月～1年6か月）



アウトリーチ「ゆるり」
支援対象エリア



作業
療法士 相手の生活を見えた
支援を提供していきたい。

宇治おうばく病院 OT室 係長
市田 忍 (和歌山県出身・かに座)

「ゆるり」では、作業療法士の立場から心身機能も含めた視点のもと、利用者の生活を支援しているという感覚です。訪問支援は、「病院に来る」患者さんと違って、どちらかその方の生活の場に伺います。ですから現場では、病院で見ることのできない些細な部分に表れる、その方の生活スタイルや価値観を尊重するよう常に気を付けています。この視点は、入院患者さんに作業療法を行う際にも重要なので、非常に勉強になります。アウトリーチで学んだことは、院内の他のスタッフにも伝え、より良いサービスを提供できるようになりたいです。



医師 現場での柔軟な対応で、
利用者を笑顔にしていく。

宇治おうばく病院
大月 祥宏 (京都府出身・おひつじ座)

院内で病棟や外来を担当するほか、「ゆるり」では担当医として必要に応じ、自らハンドルを握って利用者宅を訪問しています。訪問の際は、白衣ではなく普段着がモッパーです。単に診療を自宅に届けるのではなく、その人らしい生活をサポートする一員となるよう心がけています。「ゆるり」の特徴は、多職種で構成されることです。職種の専門性に縛られない柔軟な協力体制により、多面的に評価、支援を行います。医療者は、とかく症状などの悪い部分に目が行きがちですが、利用者の健康な側面に目を向け、地域での生活を支えていきたいです。

現場の声

栄仁会の訪問支援施設から

栄仁会では、宇治おうばく病院での診療・治療だけでなく、各機能を備えた訪問支援施設を整備してきました。アウトリーチ後、地域で暮らしていく利用者の方々を支えるのもこれらの施設。利用者の方々へ提供するサービスや、働くスタッフの声をご紹介します。



訪問
看護

「ゆるり」から当事業所への 流れはスムーズです。

当事業所では、地域でその人らしく、安心して生活が続けられるように、医療、生活を含めた看護・リハビリテーションなどの支援をしています。医療的なことだけでなく、相談相手となったり、時には一緒に喜んだり、悩んだりしながら、利用者さんやご家族により添えればとスタッフ一同、楽しく取り組んでいます。また、「ゆるり」とは、スムーズに継続して支援を行うことができるよう協働、連携を図っています。これまでに、6名ほどの利用者を受け入れています。

訪問看護ステーションおうばく 所長
黒岡 和容 (大阪府出身・おうし座)

訪問 介護

心を開いていただく過程が すごくうれしいです。

当事業所は、小規模多機能居宅介護・グループホーム・居宅支援・訪問介護を行っています。訪問介護では、様々な方にご利用いただいていて、アウトリーチを利用されている方も担当しました。私は、ヘルパーとして利用者の方の生活面のサポートを担当しましたが、「ゆるり」のメンバーの方とは、情報共有がしっかりとできており、スムーズにケアへ入ることができました。他の利用者の方も同じですが、少しずつ自分に心を開いていただく過程は、すごくうれしいものですね。



訪問介護やまぶきの郷 サービス提供責任者
松浦 君枝 (岡山県出身・ふたご座)



訪問型
生活訓練

精神疾患を抱える方の 地域定着を支援していく。

当事業所は、2013年1月に設立され、訪問型生活訓練事業として、統合失調症など精神疾患を抱える方が地域に定着するまでの支援を行っています。現在は、所長以下、専属スタッフ2名、臨時スタッフ1名が所属しています。私は、生活支援員として自宅訪問や外出同行を中心とした生活支援を支えています。施設自体の日が浅く、「ゆるり」から来られた方はいません。病院や就労支援施設の「ワークネットきょうと」、ヘルパー事業所など幅広い機関と協力して、地域生活支援のモデルをつくりたいと思います。

訪問型生活訓練「いろは」精神保健福祉士
山崎 理恵 (京都府出身・みづかめ座)

アウトリーチ終結後の支援ネットワーク

宇治おうばく病院のアウトリーチは、「ゆるり」で完結するわけではありません。目標は、利用者の方々が安心して地域で暮らすこと。支援の引き継ぎ先や進行中の地域連携室の取り組みなど、「ゆるり」が終結した後、地域のサポートへ移行していく流れをご紹介します。

「アウトリーチチーム」から「地域の支援チーム」へ 移行できる仕組みが必要

「ゆるり」は、いつまでも訪問できるわけではありません。栄仁会の施設だけでなく、地域の様々な機関や人が有機的につながって地域の支援チームを組んでいかなければ、なかなかうまく安定した生活へ移行できません。そこで、地元の宇治市地域自立支援協議会でこの課題について検討することになりました。「ゆるり」の支援終結に向け、市役所と支援センター「そら」が地域のパイプ役となり、相談支援事業所を中心とした地域のサポートチームを組んで、利用者の方をしっかり引き継いでいくという仕組みが、まさに動き出したところです。試行錯誤を繰り返しながらですが、地域の方々としっかり連携しながら取り組んでいきたいと思っています。



地域連携室 係長
大塚 剛史
(兵庫県出身・かに座)

モデルケースのご紹介

40代 男性 Aさんの場合

Aさんは20歳頃に統合失調症と診断され、精神科に3回入院したことがあります。退院後に通院・服薬を続けて安定している時期もありますが、38歳頃から通院しなくなり、単身アパートで買い物以外は外出しない生活となりました。家族は同じ市内に住んでいますが、Aさんが連絡をとることを避けていました。

通院をやめてから約5年後、Aさんが市役所や裁判所に「水道代が不正請求されている」など頻繁に苦情を訴えたり、アパートのベランダから「やめろ!監視するな!」など大きな声をあげるようになりました。家族が訪問して受診を説得しようとしましたが、「監視されていて外出できない。病院に行っても解決しない」と強い拒否がありました。同じような状況が続き、家族は困り果てて地域の保健所に相談しました。

以前からAさんは「二度と入院したくない」と言っていたので、家族はなんとか通院・服薬して安定した状態に戻ってもらいたいと考えていました。しかしAさんは外来受診についても拒否が強く、次第に家族が訪問することも断るようになっていました。家族は保健所でアウトリーチチーム「ゆるり」のことを聞き、「訪問支援であればAさんが受け入れるかもしれない」と利用希望し、後日「ゆるり」から「訪問させていただきます」と返答がありました。

「ゆるり」の看護師と精神保健福祉士が、Aさんと面識のある生活保護ケースワーカーとともに自宅を訪問しました。ケースワーカーから「Aさんの困っていること・聞いてほしいことを一緒に考えて相談に乗ってもらえる人を紹介します」と聞き、Aさんははじめ「入院せずに来たんですか?」と警戒していました。しかし看護師から「Aさんの自宅での生活を支えるために来ました。お手伝いできることがあると思うので、お話を聞かせてもらえますか?」と言われると、「不正にお金を請求されたり、監視や盗聴されて困っているんです」と話し始めました。

「ゆるり」の訪問が始まり、Aさんは、一番の困りごとである水道代の不正請求について、スタッフと市役所へ確認に行きました。また、周囲が気になって1人では行きにくかった買い物にも一緒に行き、乱れていた自宅内もスタッフと片付けるようになりました。しかし、今度は「家賃が不正請求されているのではないか」と感じたり、監視や盗聴のことでも気になったままで、次第に夜も眠れない日が続くようになりました。

眠が続きイライラした気持ちが強まってきた頃、スタッフから「医師が訪問することもできる」との説明がありました。Aさんは「前は薬の副作用が辛かった。無理やり飲まされたら困る」と一旦は断りましたが、不調が続き「眠れる薬なら飲んでみようかな」という気持ちになり医師の訪問を受け入れました。医師はAさんの生活状況を聞き取り、「自宅で生活しやすくなるために」と薬を処方し、副作用の確認などのために外来通院することを勧めました。外出に不安のあったAさんですが、一時的にスタッフが送迎することで通院できるようになりました。

その後訪問が続く中で、「買い物や調理には日常的な助けがあるほうが安心」とホームヘルプを利用するようになり、自宅周りで気にかかることには、民生委員が身近な立場で相談に応じてくれるようになりました。そのような方法で少しづつ地域の資源を活用できるようになり、「ゆるり」の訪問開始から1年が経過した段階で、外来・訪問看護・ホームヘルプ・保健所・支援センター・民生委員・家族など地域でAさんを支えていく体制が整ってきました。地域での生活に安心感を得られるようになると共に、趣味の時間をもつ余裕も出てきました。「ゆるり」は、Aさん・地域の関係者と協議のうえ、1年3ヶ月で訪問を終了しました。

連携医療機関紹介 ③ 広兼医院

1985年に精神科・神経科・神経内科のクリニックとして開業した広兼医院。廣兼元太先生は、2005年に父親が開業した医院を継承して以来、親身な姿勢で患者さんから厚い信頼寄せられています。

「当院には、アルコールや薬物などの依存症をはじめ、うつ病、統合失調症、不眠などさまざまな方が来院されます。精神疾患は誰でもなりうる。だからこそ、患者さんが安心して治療を継続できるように、身近で相談しやすい環境づくりを意識しています。」

廣兼先生は、特別支援学校や京都市の伏見区・下京区での精神保健相談など、地域での活動も積極的に行ってています。



広兼医院
〒612-8048
京都市伏見区大阪町602
TEL:075(622)3006
<http://www.myclinic.ne.jp/hirokane/pc/>

1985年に精神科・神経科・神経内科のクリニックとして開業した広兼医院。廣兼元太先生は、2005年に父親が開業した医院を継承して以来、親身な姿勢で患者さんから厚い信頼寄せられています。

「精神相談では、私も学ぶことが多いですね。また地域の病院との連携も大切にしています。宇治おうばく病院は、父が開業前に勤務していた縁もあり、緊密な連携をとっています。緊急入院など、いつも柔軟に対応していただけるので、非常に心強くなります。」



広兼医院 院長
廣兼 元太 先生
(京都府出身・おうし座)

1994年に滋賀医科大学を卒業後、公立病院や滋賀医科大学附属病院などの精神科で勤務。2005年5月、父親より広兼医院を継ぐ。趣味はウォーキングと絵画鑑賞。京都教育大学附属特別支援学校精神科校医。京都市精神保健福祉相談医嘱員。

Webでも読める べるぶ



医療法人栄仁会 宇治おうばく病院のサイトでは、過去に発行した広報誌「べるぶ」すべてのバックナンバーをご覧いただけます。TOPページ右下にある「べるぶアンケート」よりご覧ください。

また、より良い広報誌をめざしてみなさまのご意見・ご感想を受け付けております。お気軽にご意見ください。

<http://www.eijinkai.or.jp/ans/>

新田辺診療所新所長 就任のごあいさつ

当施設は、訪問看護や認知症対応デイケアを含めた『新田辺メンタルケアセンター』の一つです。私は、2013年6月1日より所長とセンター長を兼務しています。栄仁会では精神疾患に加え、早期より認知症での在宅支援にも力を入れてきました。昨年には「認知症疾患医療センター（地域型）」が京都府から指定されました。医師として外来臨床業務に努める一方で、各施設の特性を有機的に機能させつつ、地域に貢献していく所存です。



栄仁会新田辺診療所 所長
新田辺メンタルケアセンター
センター長
久郷 敏明
(岡山県出身・てんびん座)

編集後記

ついに、「記念すべき10号の発刊となりました。「べるぶ」の始まりは、2007年に0号として発刊された創立50周年の記念誌からです。当時、訪問支援といえば、訪問看護と訪問介護しかありませんでした。それから約5年。今号で、栄仁会の訪問支援を特集し、あらためて狭間に立ておられる方々のニーズにお応えしようとしてきた栄仁会の姿勢を実感しました。栄仁会で統合失調症支援に携わるスタッフの熱い想いを少しでもお伝えすることができるは幸いです。

（広報委員会・大塚剛史）

“よりそって医療、よりそってケア” 栄仁会スタッフ募集

職種 ①看護師 ②准看護師 ③看護補助者（無資格可）

勤務 ①② 8:30～17:00・16:45～翌8:45（病棟2交替制）

③ 8:30～17:00（早出・遅出・夜勤有／週5日）

待遇 ①② 年間休日113日（うるう年は114日）、有給休暇・特別休暇・各社保完備 ③各社保完備

①② 常勤者には、就職支度金として20万円支給！

応募・問い合わせ 詳細はお気軽にお電話ください。

0774-31-1362 (担当／総務管理室 松本)

院内
保育所
完備！

法人事業所介護スタッフも
同時募集

